

社会人に必要な文章力

Writing Skills Necessary for Working People



公益財団法人日本漢字能力検定協会 現代語研究室長

佐竹 秀雄

国立国語研究所室長、武庫川女子大学言語文化研究所長（同文学部教授）を経て現職。武庫川女子大学名誉教授、日本広報協会広報アドバイザー。編著書に『デイリーコンサイス国語辞典』『サタケさんの日本語教室』『文章を書く技術』など。

✉ shinjin.sat@gmail.com

☎ 0798-68-4531

1 本稿の背景とねらい

筆者は日本語の文章や文書の検定にかかわって40年近く経つ。その間、企業の管理職の立場にある人々から、「近ごろの若い者はまともな日本語の文章が書けない」という不満の声を聞き続けてきた。かつて「近ごろの若い者」であった人が管理職になるのに十分な時間が経過しているのに、不満の中身は変わらない。

このエピソードには、2つの興味深い問題が含まれている。1つは、整った文章を書けることが、企業などにおいて重要だという認識が、管理職にある人たちに長年共有されてきていることである。そして、もう1つは、管理職になると、自分は文章が書けていると思うようになることである。

後者の「自分が書けている」という認識が正しいかどうかは疑わしい。ただ、日本の社会、特に、企業内ではフォーマットに合わせた文書を書くことが求められ、そのためには経験がモノを言う事情があることは容易に想像できる。発言は、そうした事情によるものと思われ、「まともな日本語の文章」が「適切な日本語で論旨の通った内容の文章」を指し示すものである保証はない。

他方、前者の、文章が書ける重要性が認識されていることは間違いない。しかも、その認識は企業の管理職に限らず、一般の大多数の人も持っている。そして、その理由の一つは、皮肉なことだが、多くの人にその力が不足しているからだろう。文章をうまく書けない腹立たしさを味わっている人が多いのである。実際、文章を書くのが得意かと質問すれば、苦手だと答える人が圧倒的の

数を占める。

文章作成を苦手に思う根本的な原因は、文章力の指導・育成がうまく機能していないことにある。学校教育で作文指導が成功していないことは間違いない。大学生の多くは論文やレポートの作成に四苦八苦しているし、大学を卒業して社会に出ても、必要な文章をさっさと書けない人が少なくない。

学校現場における作文指導について、筆者の所属する日本漢字能力検定協会では、文章に関する検定制度（文章読解・作成能力検定）を作って側面的な支援を目指している。その内容は、社会人に対しても一定の効果を上げるものである。しかし、社会人向けの支援策を考えるのであれば、社会人にとってより重要な要素を強化した内容にして、より効果的な検定にすることが望ましい。社会人に対して文章力を高める方法があれば、社会にとって有益なのは間違いない。

ここでは、社会人のための文章指導法や社会人自らの文章学習法、あるいは、社会人の文章力を評価するシステムの開発を視野において、それらに効果的な条件や留意点を整理する。つまり、社会人に求められる文章力とはどのようなものを明らかにして、その上で、文章力を高めるためには、どのようなことがらを指導、あるいは、当人が学習すればよいのか、また、文章力を測定するポイントは何かなどについて考察する。なお、社会人といっても幅が広いので、ここでは文章や談話など言語とかかわりの強いビジネスパーソンをイメージして話を進める。

上述の目的のために、次の手順で考えを進める。

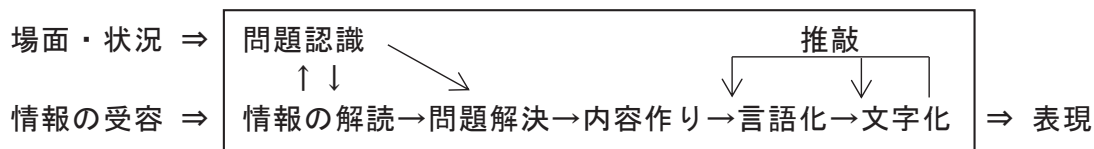


図1 文章作成の過程

- (1) 一般に文章力と呼ばれているものが、どのようなものであるかを、文章作成過程をもとに分析する。
- (2) 文章力には複数の言語能力がかかっていると想定されるので、文章力と言語能力、および、言語能力相互の関係を考察する。その結果を踏まえて、文章力を支える言語能力を明らかにする。
- (3) 社会人の文章力に限定して、その向上に効果的な言語能力を抽出する。そのために、社会人になるまでに十分獲得されていない言語能力と、社会人にとって重視される言語能力の2つの視点から考察する。
- (4) 抽出した言語能力を測定するためには、どのような点に留意する必要があるかについて言及する。

2 文章作成のプロセスと文章力

そもそも社会人に限らず、一般に必要とされる文章力とはどのようなものであろうか。それを考えるために、文章作成という行動を分析する。

文章を書くシーンを考えると、仕事でレポートをまとめるにしても、日常生活で手紙を書くにしても、当然、書く要求ないし必要が存在している。それを満たすために「書く」という行動が行われる。そこから、文章作成を「ある状況において、必要や課題が生じたとき、その解決のための対策を考え、その内容をだれかに伝える一連の行為である」と定義する。

この定義を踏まえて、文章作成である一連の行為のプロセスを分解すると、図1の流れを想定できる。図1は文章作成の過程を、次のようにとらえている。

まず、自分が直面している場面や状況の中で、文章作成がかかわる解決すべき問題があることを認識する。あるいは、受け取った情報を分析・解釈していく中で、文章がかかわる問題解決の必要を認識する。具体例としては、試験で課題作文を書く、手紙やメールを受け取って返事を書く、あるいは、検索して得た情報を分析して報告書にまとめるなど、一般的な文章作成シーンが該当する。

その後、解決すべき問題に対処するために思考し、その対処法や思考の結果を整理して内容を作り、それを言語化し文字化することになる。その際、より望ましい行動としては、文字化の後に推敲というフィードバックの過程が加わる。このような流れを通じて文字化された結果、表現物としての文章が生み出されるのである。

以上から、文章作成過程は、問題解決を目指して一つの情報を作り上げる行為だととらえることができる。その意味においては、文章作成行動は問題解決行動であり、同時に情報処理活動であると言える。

3 文章力を支える多くの言語能力

以上の文章作成のプロセスにおいて、個人のさまざまな言語能力がかかっている。例えば、情報の解釈をする段階では、情報に対する読解力や分析力がかかわるし、問題解決にあたっては、解決策を作り出す思考力や、思考内容の価値評価に関する判断力がかかわる。内容作りの段階では、新たなものを生み出す創造力もかかかってこよう。さらに、文章化する段階では、読み手に効果的に伝えるための文章構成力、表現力、さらには読み手の立場にまで配慮した表現を模索する力などもかかわる。このような文章作成過程における段階と能力の関係を図示すると図2のようになる。

図2で、上段に位置している部分は、図1の文章作成の「書く過程」であり、その各段階でかわる能力を中段と下段に示している。下段の能力は、基礎的な言語能力であり、中段は、その基礎言語能力が複合して働く言語能力である。例えば、語彙や文法に関する能力は基礎的な能力であり、これらは文章という書きことばだけでなく、会話における話しことばの際にも共通して働く基礎レベルのものを想定している（もちろん、識字力は書きことばだけであるが）。これらの文字、語彙、文法などの能力が複合して働いて、読解力や内容作成力などになる。

さらに、図の「基礎言語能力」も「高次言語能力」も

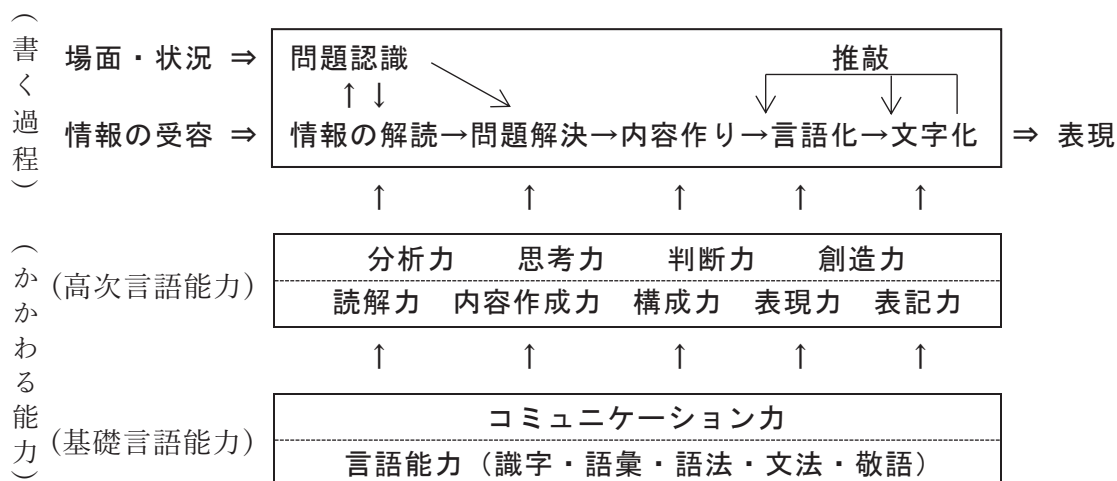


図2 文章作成の段階と言語能力

上下2段に分割しているが、それぞれ下の方が言語との関連性がより強いものである。つまり、上に示した力は抽象的な能力と言える。

図2からは、文章作成行動には多くの能力がかかわっていることが認められる。したがって、文章力というものも、単一の能力として存在すると考えるのではなく、さまざまな能力による総合的な力だと認識すべきである。文章力がないと思われる人は、例えば基礎的な言語力のいずれかに不十分な点がある場合も、読解力や内容作成力などに問題がある場合も考えられる。その人の文章力を構成するどの言語能力に欠点があるかを見極めることが必要になってくる。それなのに、「近ごろの若者は文章力がない」などと、さもわかったふうなセリフで片づけようとする人がいるが、それぞれ文章力の本質がわかっていない人間のセリフだということになる。

また、文章作成にかかわるさまざまな能力は、同じレベルのものばかりではなく、基礎的な言語能力から複合的な言語能力まで、レベルの異なるものが存在していることにも注意を要する。識字力や語彙力など基礎的な言語能力は、ある程度、知識によってカバーできよう。しかし、文章を構成する力や、その場面での適切な表現を見つける力など高次の言語能力は、知識だけではどうにもならないし、単純な練習の繰り返しで身につくものでもない。

4 指導・学習の対象となる言語能力

前章で、文章力は多くの能力による総合的な力であり、その能力は異なるレベルのものが混在していると述

べた。では、そのような性質をもつ文章力を高めるには、どのような取り組み方をすべきなのだろうか。文章力を高めるための指導、あるいは、自分で文章力を高める学習をするにあたって、どのような言語能力に注目すべきなのかという問題である。

文章力は多くの言語能力の複合体なのだから、その要素となる個々の言語能力を鍛えるべきだというのは合理的な考え方である。過去には、文章力なる単独の力の存在を信じ、文章力をつけるためには実践あるのみで、ひたすら作文を書かせるという指導法もあったと聞く。しかし、それは決して効率的ではない。元から文章を書く力に恵まれた児童・生徒による成功例と、圧倒的多数の作文嫌いを生んだだけである。

文章力を高めるには、図2に示した、「分析力・思考力・判断力・創造力」「読解力・内容作成力・構成力・表現力・表記力」「コミュニケーション力」「言語能力（識字・語彙・語法・文法・敬語）」について、項目ごとに個別の指導が必要だということになる。ただ、現実問題として、すべての項目について指導するというのは、膨大な指導が必要となり、現実的ではない。

また、「分析力・思考力・判断力・創造力」は抽象的な力であり、「読解力・内容作成力・構成力・表現力・表記力」に支えられて機能すると考えることができる。よって、分析力や思考力を直接指導するよりは、読解力や内容作成力などを指導する方が具体的で現実的である。

さらに、「コミュニケーション力」についても、同様の考え方から、「言語能力（識字・語彙・語法・文法・敬語）」についての指導が前提となる。ただ、「コミュニケーション

ン力」については、「読解力・内容作成力・構成力・表現力・表記力」を支える性質をもっており、無視してしまうことはできない。

以上から、文章力の指導においては、「読解力・内容作成力・構成力・表現力・表記力」および「コミュニケーション力」「言語能力（識字・語彙・語法・文法・敬語）」をターゲットにすべきだと考えられる。

5 社会人が重視すべき言語能力

5.1 学校作文と社会人の文章との差異

前章の結論を踏まえると、学校現場では、これらの能力の育成を当然重視して行うべきである。実際、識字・語彙・文法などの基礎的な言語能力に関しては、義務教育の段階で教える内容もある程度決まっているし、効果的な指導法も研究されてきている。ただ、残念ながら効果が十分に上がっていないのも事実ではあるけれど。

では、学校現場ではなく、社会人の文章作成に必要な言語能力の育成となると、どのように考えるべきであろうか。学校における作文教育と社会人における文章教育は同じでよいのだろうか。理屈の上では変わらないはずだが、学校現場で運用されている文章指導の状況を勘案すると、まったく同じままでよいとは言えないようだ。

学校教育では、人格形成にかかわる面を文章教育と関連させて行われていることが多い。例えば、自分自身を見つめ直す、生き方を考えるといった課題を作文教育の目標に掲げられていることがある。かつての綴り方教育の要素を取り入れた方法である。

そこでは、自分自身の思いや主観的な考えを整理することが目的となりやすい。整理する過程で、自分自身や生き方を見つめて考えることに意味が見出される。整理した内容を誰かに伝えることが重視されることはない。他方、社会人の文章では、他人に伝達するというコミュニケーションこそが目的であり、個人的な思いを述べることはほとんど要求されない。特に、ビジネスパーソンの文章ともなると、自己表現を重視する学校現場の文章とはきわだった差異が存在する。

5.2 学校教育で不十分だった言語能力

このように学校現場と社会人の世界では、文章の性格や重視される点が異なっている。よって、社会人向けの

文章力について考えるためには、社会人に必要な言語能力を究明する必要がある。それにはどうすればよいか。

2つの視点から考えることができる。その1つは学校教育で十分に養えなかった力を取り上げるという視点である。学校教育で、それなりの効果を上げているものもあれば、実を結んでいないものもある。その不十分な面での補強という視点で考える立場である。

例えば、基礎的な言語能力の識字能力については、社会人で一から指導をする必要はないだろう。もちろん大人でも漢字を間違えることはあるわけで、それはどうでもいいことではない。そこで、これらは指導の対象ではなく、個人が必要に応じて学ぶ対象だとみなすのである。また、語彙や文法についても同様、多くの人が間違いやすいものとはかく、わざわざ基本的な事柄の指導をする必要はない。つまり、基礎的な言語能力に関しては、敬語以外は、指導の対象から除外する。ただし、それは無視するわけではなく、個人の学習に委ねる扱いにするのである。

「敬語に関する能力」については、ミスをすると現実の人間関係に大きな支障をきたす。笑い話ですまない問題を含むので看過できない。インターネットの世界でも、社会人を対象とした、敬語に関する質問と回答があふれている。さらに、その中には間違った回答が堂々と述べられていることもある。敬語に関する能力は学校教育で十分に養えず、現にその学習の場さえも不十分な状況にある。

「コミュニケーション力」も、最近でこそ学校教育でその価値が声高に叫ばれ始めたが、まだ十分に扱われていない。学校作文は、自己表現に主力が置かれ、読み手を意識した文章が軽く扱われているのが現状である。その意味で、コミュニケーション力は重要な要素として取り上げる。

もう一点、学校教育で十分に養えなかった力で、特に取り上げたいことがある。それは「読解力」である。学校教育では、読解の学習は非常に熱心に行われている。指導法の研究に関する書物も多く出版されている。ただし、扱われる教材の多くは、文学作品である。そのためか、読解の対象が登場人物の感情や心理に偏りがちである。しかも、その読み取りに学習者の心理と比較する主観的な手法がとられやすい。それに対して、現実の社会では、事実を読み取りそれを踏まえて分析する客観的



な読解が必要である。例えば、調査結果や研究報告に示されているデータや事実のポイントとなることを読み取り、その事実から1つの見解を導き出すような仕事及要求される。そのときに、客観的な読解力が役立つのである。その意味で、かつての学校教育の読解指導とは少しタイプの異なる読解指導、または、読解学習が求められる。

5.3 社会で必要とされる言語能力

社会人に重視される言語能力を考えるための第2の視点は、社会で特に必要とされる力である。最初に断ったように、本稿では、社会人をビジネスパーソンと想定している。そこで、ビジネスパーソンに必要な能力を考えるために、彼らが向き合う文書の内容を推測してみる。すると、「案内・通知・報告・返事」のように伝えることを中心とするものと、「依頼・要求・提案・おわび」のように相手の気持ちを説得する要素を含むものがありそうだ。

前者の場合、例えば報告書なら、伝えるべき内容を自分の中で整理し、それを相手が理解しやすい形に再構成して文章化することがポイントになる。ということは、内容を把握、整理する「読解力」や、相手に伝わりやすくするための「構成力」「表現力」「コミュニケーション力」が重要になってくる。

他方、後者の場合は、例えば依頼文を考えると、依頼に必要な項目や条件を整理し、それを相手が納得するような表現で文章化することが重要となる。それゆえ、言語能力として大切なのは、内容を作りあげるまでの「分析力」「内容作成力」や、説得力のある表現のための「構成力」「表現力」、および、対人関係にかかわる「コミュニケーション力」「敬語に関する能力」などが考えられる。

なお、ビジネスパーソンが扱う文書について、内容ではなく形式という点に目を向けると、手紙やメールのように受け手を強く意識しなければならないものがある。これらでは、対人関係にかかわる「敬語に関する能力」が重視されよう。

5.4 社会人に求められる言語能力

以上をまとめると、社会人にとって指導の対象として扱われる言語能力の候補としては、「読解力、内容作成力、構成力、表現力」、および「コミュニケーション力」「敬

語に関する能力」が挙げられる。そして、残りの「表記力」と基礎言語能力の「識字・語彙・語法・文法」は、先にも述べたが、社会人となる以前に基本となることが獲得されていてしかるべきものとなる。

「表記力」と「識字・語彙・語法・文法」に関しては、指導の対象にする必要はないが、個人による学習の対象にはなる。よって、文章力を支える言語能力の測定という立場では、当然その対象となるということである。

また、これと関連して重要になってくることがある。それは「推敲」である。推敲は、一般には一通り書き上げた文章の誤りを正す作業と位置付けられている。その際に対象となる誤りには、誤字・脱字、テニヲハの誤りがイメージされる。それは、まさに、「表記力」と「識字・語彙・語法・文法」の問題と直結する。

ところが、推敲は文章作成のプロセスで、上述のイメージ以上の重要な役割を果たす。多くの人々は、表記上のミス推敲の対象ととらえる。しかし、推敲は、単に表記上のミスにとどまらず、読み手の立場に立って、表現を見直す作業をすべきなのである。つまり、推敲は、表記だけでなく、表現にもかかわっているのである。

そこで、社会人に求められる言語能力としては、「表記力」と「識字・語彙・語法・文法」に関する能力を含む「推敲する能力」を、「読解力、内容作成力、構成力、表現力」「コミュニケーション力」「敬語に関する能力」に加えることが妥当と考えられる。

6 言語能力測定のための留意点

本稿の最終目的は、社会人の文章力を測定するための必要事項を整理することである。例えば、読解力を測定するには、読解の対象となる文章や情報が必要だ。そのとき、どんな文章や情報でもよいわけではない。先述のように、社会人の場合には、事実を読み取る客観的な読解ができるものがふさわしい。このように、言語能力の測定にあたって留意すべきことがある。それを能力ごとに整理する。

改めて確認するが、測定する言語能力は、「読解力、内容作成力、構成力、表現力」「コミュニケーション力」「敬語に関する能力」「推敲する力」である。以下、これらの能力測定のための課題設定や作問にあたっての留意点を述べる。この内容は、能力測定に限らず、能力育成

の場面にも応用できるはずである。

(1) 読解力の測定には、一般的な文章において、筆者の主張のほか、段落、文、語句の意味や働きを読み取る課題が挙げられる。特に、意味の読み取り以上に役割の読み取りが効果的である。役割の読み取りは情報伝達にかかわり、コミュニケーションに必須の能力だからである。

また、読解力に関してはすでに述べてきたように、客観的な読解を対象に含めたい。特に、グラフや表を含む文章において、個々のデータの読み取り、データ傾向の読み取り、文章とデータの関連の読み取りなどが測定の要素となる。さらに、読解力の測定で実施したいことが要約である。要約は、その文章の主旨や意図、あるいは、筆者が重視している事柄を読み取る必要があり、全体的な読解力を測定する格好の方法である。

(2) 内容作成力は、実際に記述することを指示して、その結果の内容を評価、測定することになる。評価は、書かれた内容の出来と無関係ではいられないが、立場や主観に左右されやすい。そうした主観を排した測定をするには、内容を作るにあたっての条件を限定するしかない。課題を与えるときに、立場や考え方を最初から決めて内容を作らせる指示をすることになる。

その際の課題であるが、現在筆者がかかわっている、主に教育現場を対象とした文章読解・作成能力検定では、生活の中で議論されることをテーマとした意見文や論説文を課している。それに対して、社会人の場合は、意見文・論説文ではなく、レポート形式のものが適切だと考えられる。理由の1つはレポートの方が社会人にとって実践的だからである。そして、もう1つの理由は、社会人が意見を述べるシーンとして、仕事上の個別問題ではあるかもしれないが、生活の中で生じる一般的な問題での議論はきわめて少ないからである。

(3) 構成力の測定のためには、2つの視点からの課題が可能である。1つは、示された文章の構成を把握する能力を測定するものである。論理的な文章を提示して、その文章構成を把握できるどうかをチェックする課題である。もう1つは、文章の内容となる材料を箇条書きで与え、材料それぞれの性格を読み取らせ、最も説得力のある順番に材料を並べ替えさせる課題であ

る。

(4) 表現力には、正確で厳密な表現力、読み手を感動させる表現力、独創的な表現力などさまざまなものがある。そんな中で、社会人には何より伝わる表現力を課題にしたい。具体的な方法としては、与えられた文章における表現について、「意味の解釈」、「表現の役割、効果の分析」を問うことが考えられる。例えば、文章中の「他人」を仮に「第三者」に変更すると、その文脈において、意味が変わるか否かを答えさせるような問いが設定できる。類義表現の違いを利用した表現力のチェックが可能である。

(5) 「コミュニケーション力」については、独立させて測定する必要はない。この力はいかに読み手を意識してわかりやすく、あるいは自分のねらい通りに伝えられるかの能力である。それゆえ、文章の構成、表現に反映されるし、敬語や表記にもかかわる。よって、これらの能力測定で間接的に測定するのがよい。

(6) 「敬語に関する能力」は、直接的に知識を問う方法と、状況や文脈にふさわしい敬語形式を問う方法が一般的である。後者の方がより実践的なので、社会人向けには後者がよいだろう。

(7) 「推敲する力」は、最も実践的な課題になる。すでに述べたが、推敲は単なる間違い探しではない。よりよい表現・表記を目指して行う行為である。したがって、能力測定も、誤字・脱字・文法ミスに限らず、表現の不適切なものも、敬語に関する誤りも含めて行うのがより望ましい。

以上には、試みの案も含んでおり、問題点もありうる。実際に測定を行うにあたっては、測定する能力の配分も含めて、どのような課題でどのように測定するのかという具体的な方法を考案する必要がある。今後の課題である。

参考文献

- [1] 佐竹秀雄, 文章指導の意義と提案, 武庫川女大学言語文化研究所年報第24号, 2012
- [2] 日本漢字能力検定協会『基礎から学べる! 文章力ステップ』(4級・3級・準2級・2級), 2015 ~ 17